験を積んでからは、少し自由になってみてもいいのではないかとも思う。

白岩はこのほか、湘南歌会のもう一人の師・安藤寛に初めて添削を頼んだ際に、安藤から文庫版の『新訓万葉集』(上下二冊)を送られたエピソードをつづる。ところどころに「赤いボールペンの書きこみがあった」という。これはまさに、まず型を覚えなさいという教えだろう。近現代の短歌も含めて、心に残る作品をノートに書き残す営みは、先人の作品を自らの歌の血や肉とするトレーニングといえる。

白岩がもう一つ挙げるのは、築地正子の「歌はあなたの心の中にあるのよ。それを詠めばいいのよ」という言葉だ。どんな歌にも種火がある。それは日常の出来事かもしれないし、感情を揺さぶられる非日常の体験かも知れない。いずれにせよ、心の中に種火が生まれなくては、歌にはならない。もっと気安く構えて、心の中にある種火を歌のかたちにすればいいのよ、そんな築地の言葉は後輩へのエールであり、肩に力の入った歌人を少し楽にする。

三人のすぐれた師や先輩の言葉は、結社に属していればこそ、とも言える。このほかに白岩はこのごろ、祖母つや子の〈再生のわれは小鳥に生まれ来むみそささへよし鶯もよし〉(『芙蓉第二集』)など二首を心の拠りどころにしているという。

二月号の二人目は、佐佐木頼綱の「歌と出会い直す」。東京歌会の仲間だった笹本碧の突然の死に始まる文章で、頼綱が述べるのは、それぞれの人生の経験が歌の新たな解釈を導いたり、読みを深めたりするということだ。目の前に見えていたはずの景色が違ったものに見える。逆に言えば、それまで見えていなかったものが見える。それが「出会い直す」ということだ。

娘の歌集を読んだ笹本の父信夫は、頼綱に「碧がなぜこんなに一生懸命だったのかよく分からなかった。でも本を手に取って色々わかった」と述べる。そして自らの父の句集を久しぶりに開くと「今になってわかる俳句がいっぱいあった」と言ったという。まさしく「出会い直し」だ。

「作品は価値を変えずに存在し続けるが受け取る側に準備が必要なことは常であろう」と頼綱は言う。それまで素通りしていた作品だが、実はずっと変わらず価値を持ち続けている。そして、作者が経験を積むことで初めて見えるようになる…。画家のゴッホや田中一村が死後に評価されたのもこうした「出会い直し」の変奏形だろう。

頼綱は自身の経験も例に挙げる。妻のコンサートで初めて知った越谷達之助作曲の「初恋」。この石川啄木の短歌を歌詞とした曲をきっかけに、越谷のことを調べた頼綱は、自らの曽祖父信綱が編集した合同歌集『戦盲』の中の十首に越谷が曲をつけた「戦盲歌」があることを知る。合同歌集の歌はいくつかを読んでおり、注目した歌もあったが、越谷が選んだ十首とは違った。〈ふと思ふ我が名書けずになりてより幾月ならん文字のかきたし〉。この西塔高記の歌などと「出会い直し」た頼綱は、素通りしていた歌の価値をあらためて知る。

さらに自らが目の不自由な義父を持つという経験により、さらなる「出会い直し」につながる。作曲家の義父は時にサインを求められるが、目が見えないため思うに任せない。その苦しさ、悲しさを直に耳にすることで、西塔らの歌により深く分け入ることができたというのだ。

「出会い直し」の機会を与えられず世に眠る秀歌は、どれほどあるのだろう。私自身、画廊の窓に掲げられた美しい絵をろくに見もせず、急ぎ足で通りすぎていたのかもしれない。そんなことを考えさせられた。